令和６年度

自己点検・評価書
(学校評価報告書)

附属平野小学校

１　附属平野小学校の現況

（1）　学校名

大阪教育大学附属平野小学校

（2）　所在地

大阪府大阪市平野区流町１－６－４１

（3）　学級数・収容定員

１８学級(１学年３学級)　収容定員６３０人(１学級３５人)

（4）　幼児・児童・生徒数

６２４人(男子　３１１人・女子　３１３人)

（5）　教職員数

校長(併任)　１人，副校長　１人，主幹教諭　１人，教諭　２６人(うち，栄養教諭１人，任期付教諭６人，育児休業１人，在外１人)，非常勤講師４人，スクール・カウンセラー　１人，スクールサポーター　１人
事務職員　２人(非常勤２人)，事務補佐員１人，常勤用務員（調理師）１人，臨時用務員(用務員)２人，臨時用務員(調理師)４人

２　附属平野小学校の特徴

本校の特徴は、自分自身が社会の一員としての自覚をもち，より良い未来を思い描き，その実現に向けて能動的にアプローチし続けることができる資質・能力を備えた子どもを育成することにある。

そのために、「確かな学力」を培うとともに、自他を尊重し、多様さを認め合い、自他の生命を尊ぶ「豊かな人間性」を育むことが必要であり、教職員・保護者・地域の連携によってその育成を実現していく学校である。

３　附属平野小学校の役割

① 義務教育学校として、児童の心身の発達に応じた初等教育を実践する。
② 教育実習の実施校として、教育実習の指導にあたる。
③ 教育研究の推進を図るため、大阪教育大学と密接な関係を保ちつつ、実証的な研究を行う。また、教育の成果を発表し、わが国の教育の発展に寄与することに努める。
④ 国の「拠点校」、地域の教育の「モデル校」として寄与する。

４　附属平野小学校の学校教育目標

「ひとりで考え　　ひとと考え　　最後までやりぬく子」

○　「ひとりで考え」…知的好奇心に基づく主体性
興味・関心をもって対象に関わり，自らの経験や各教科の学びを活かしながら，より良く対象に働きかけることのできる子どもの姿。

○　「ひとと考え」…支え合う協調性

他者の視点で物事を考えたり共感したりして，互いを尊重し合い，他者に積極的に関わり，より良い関係を築こうとすることができる子どもの姿。

○　「最後までやりぬく」…自己調整しながら自己実現に向かう創造性

自分なりの課題を見出し，その課題解決のために計画を立てたり，過程を工夫したりする子どもの姿。自身の活動を振り返り，自分なりの新たな意味や価値を見出すことができる子どもの姿。

5　附属平野小学校の学校教育計画

1、一人一人を大切にした学習の中で、確かな学力を育成する。

私たちは、「楽しく、充実感のある」授業や教育活動を通して、一人一人の子どもたちの良さや可能性を伸ばしていくことを学校教育の最大の目標としている。そこでは、私たちは、知識や技能を一方的に身につけさせることのみに埋没するのではなく、子ども一人一人を見据え、個性化された学習の中で、一人一人に確かな学力を育成する。

そのために、私たちは、指導理念や指導技術の共有化に努め、一人一人の子どもに応じた指導を進めていく。また、子どもと子ども、子どもと教職員の信頼関係に裏打ちされた「学びの共同体」づくりに尽力していく。

2、人との関わりの中で、基本的な生活習慣や公共心を身につけさせる。

この数年間、掃除や給食指導をはじめ生活指導上の問題まで「当たり前のことをきちんとする」子どもを育てようという取り組みを進めてきた。この間様々な実証的研究により、生活習慣・規範意識と学力の間に高い相関関係があることが明らかになった。

そこで、今後も、「確かな学力と豊かな心」を身につけた子どもの育成をめざして、基本的な生活習慣や公共心をしっかりと身につけ、生活面でも真に自立した子どもを育てていく。そして、人との関わりの中で、自分自身を評価し、他者の評価を真摯に受け止め、よりよい自己を創り上げていこうとする子どもを育てていく。

3、保護者や幼稚園・中学校・高等学校・特別支援学校並びに地域・大学との連携を深める。

私たちのめざす教育は、小学校の教職員のみの力で実現できるものではない。よりよい教育は、学校と家庭、地域、他校園、大学とのよりよい関係の中でつくられる。

そこで、本年度も本校の教育活動の成果や課題、改善の方向などを広く発信することで、理解を深め、積極的で建設的な協力関係を築き上げていく。また、保護者や地域、幼稚園、中学校、高等学校、特別支援学校、大学との連携を中心に、一人一人の健やかな成長を支えるという視点から「確かな学力と豊かな心」を育成できる理論と実践を明らかにし、様々な地域の教育実践に貢献できるようにする。

６　附属平野小学校の令和５年度　重点目標(評価項目)，具体的な取組内容(評価指標)・評価結果

評価の基準

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	おおむね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校教育目標	「ひとりで考え　　ひとと考え　　最後までやりぬく子」
学校教育計画	１、確かな学力の育成に資するバランスのよい教育課程を編成し、実施するための研究活動の最適化（①教育課程・学習指導、⑦組織運営、⑧研修、⑩施設・設備） ・研究開発指定校として，研究主題「未来の社会を創り出す子どもを育てる概念ベースの探究カリキュラム開発」を追究する中で、新教科「未来探究科」を軸とする教育課程を編成する。

本年度の重点目標（評価項目）	具体的な取組内容（評価指標）	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
（1）確かな学力の育成に資するバランスのよい教育課程を編成し、実施する（①教育課程・学習指導）	ア．未来の社会を創り出す子どもの育成及びそのような子どもを育てる概念ベースの探究カリキュラムの開発に向けて，学校教育活動全体において新教科「未来探究科」を核としたカリキュラム編成を行う。	これまでの「未来そうぞう科」の研究を活かし，今年度より研究開発学校として，新教科「未来探究科」を核として，概念ベースのカリキュラム開発を行った。　実社会・実生活で生かされる力を育成する「概念」ベースのカリキュラムマネジメントを行うとともに各教科の学習内容の統合・横断してカリキュラム編成することにより，少ない時数で豊かに学ぶことを目指した。発表意欲の高まりや実生活とのつながりを児童自身が見出す姿も見られたが，各教科の学びがどのように変容したか，今後丁寧な検証が必要であると考える。	新たな研究が始まったため，研究の方向性や用語，子どもたちの姿等について，共通理解をする場が必要である。職員一人一人の思いを汲み取る研究の在り方を探る必要がある。	B	保護者アンケートより「「未来探究科」はこれからの社会を生きるために必要が力を培っている」という項目では９７％の方から「そう思う」との回答があった。記述アンケートでは各教科の基礎的な学力の獲得に不安を感じるものも見られた。	B	研究に関わる職員の共通理解を深めるとともに，来年度も引き続き，探究的な学習のより良い在り方を模索し，概念ベースのカリキュラムの検討・改善を続けていく。統合・横断された各教科の学びについて，これまでとどのように変容したか見取り，必要に応じて改善していく必要がある。
	イ．新たに編成した教育課程について授業を語る会や指定授業，研究	春・秋の指定授業を実施し，研究協力員や共同研究者にご来校いただき，助言を受け，改善を図るだけでなく，多様な指導助言の	研究授業だけでなく，日々，教員がお互いの	B	研究会後のアンケートより「総論がわかりやすく	A	来年度も，概念形成をキーワードとしながらカリキュ

	発表会などで発信し外部評価を得て見直す機会を設定する。	先生方より，ご指導をいただくことができた。２月の研究発表会では，広い地域から多くの先生方に来校いただき，多くのご意見をいただくことができた。今後の研究にいかしていきたいと考える。	授業を気軽に見にいき，授業について語り合える場を増やす。		なっている。」「今後の教育の方向性やあり方を考えることができた」との回答があった。		ラムを改善し研究を見直していくと共に，定期的に外部評価を得られる機会を設定し，研究を続けていく。
（2）確かな学力の育成に資するバランスのよい教育課程に基づく授業づくりの視点と方法を教員間で共有する。（⑧研修）	ア．校内研究授業を定期的に実施し，教員間で同じ子どもの姿を見ながら，本校においてめざす子ども像，研究において追究するカリキュラムの在り方について語り合い，教職員間で共有できるようにする。	定期的に研究授業を行うことで，それぞれの教員が年２回は授業公開が行えるようにした。その中で，新たに目指す資質・能力や「概念」をベースとした未来探究科のカリキュラムについて見直しをはかった。研究開発初年度ということもあり，「概念」の捉えや「概念」と目標の関係性などが当初，明確になっておらず，共通理解にかなりの時間を要した。	校内研究授業後のみでなく，その後の研究の進め方，研修の在り方までを視野に入れて，教員一人ひとりが参加して良かったと思える研究計画を立てる。	B	指導助言の先生方より「初年度としては，十分な成果が見られているのではないか。」という評価をいただいた。	A	来年度も，早い時期に校内研究授業を行い，同じ子どもの姿を見て語り合える機会を設定することで，研究について共通理解を図り，進めていきたい。
	イ．＜「JS プロジェクト」の実施＞地域貢献のため，公立小学校の研究を年間継続してサポートする。研究授業に向けての打ち合わせ，指導助言等に教員を派遣し，地域の学校の研究を支えると共に，その学びを校内にも還元できるようにする。	「地域貢献推進委員会」において，本年度は，３校で実施した。校内からは，依頼がある度に，毎回２名体制で教員を派遣することで，一人で抱えるのではなく，他校の研究推進支援について共に話し合いながら進められる環境をつくった。内容についても，公立小学校のニーズを大切にし，進めることができた。近年，具体的な研究内容に関する指導の依頼だけでなく，「若手教員ばかりになったため，そもそも研究をどのように進めていけばよいのかわからない」といった，研究の進め方についての問い合わせも増えている。次年度について，既に依頼を受けている学校もあるため，今後も今年度のニーズを参考に，よりよい地域貢献推進の在り方について模索していきたいと考える。	校内での共有が不十分になっている。どのような内容で支援をしているのか，年度末に共有することで，翌年の支援やオープンカフェの内容に生かしていけるようにする。	A	支援校の先生方より「継続して指導していただけることは非常にありがたい。次年度も引き続きお世話になれたらと思っている。」という評価をいただいた。	A	「未来そうぞう科」の中でも地域とのつながりが深まっている。（4 年生の職業体験・1 年生の幼稚園交流・6 年生の社会体験など）ただ地域への発信となると弱さがあるので，新しくなる HP での情報発信の充実をはかりたい。
（3）確かな学力の育成に資するバランスのよい教育課程を編成できるように組織運営の最適化を図る。（⑦組織運営）	ア．校務分掌の再編を図り，マンパワーではなく，組織として，それぞれの課題解決を進められるようにする。	全員研究部員として，これまで数人の研究部で担っていた膨大な業務を適正に配分することができた。それぞれが当事者意識をもって研究に取り組むことができた部分もあるが，やはり研究開発初年度ということで，見通しが持てなかったため，業務内容によっては一部の教員に偏る部分も見られた。	未来部門をうまく機能させることができなかった。全員が当事者意識を持つことはよいが，責任の所在が薄れてしまう恐れがある。	B	指導助言の先生方より「研究本部がかなり高度なことを目指している。全員がより高い意識をもって，学び続けることが必要ではないか」という意見をいただいた。	B	次年度については，各部門のチーフが研究戦略会議に入ることでトップダウンやボトムアップのみの組織ではなく，健全な意見集約がなされ，自分の考えも研究に生かされるという感覚を一人ひとりが持てる形にしたい。

（4）確かな学力の育成に資するバランスのよい教育課程の実施のための施設・設備の最適化を図る。（⑩施設・設備）	ア．ＩＣＴ教育環境の整備のために、児童用タブレット、指導者用タブレットの整備を図ると同時に，オンラインにて授業や行事を実施するための校内環境整備を行う。	GIGA スクール構想に伴って，1 年生には Ipad，2～6 年生には chromebook を一人一台割り当て，使用を開始した。各教科の授業の中で，子ども自身は使いこなしている。また，今年度より，2 年生以上の学年では「学びポケット」というアプリを宿題に活用し，反復学習のフォローができ，かつ，教員の働き方改革につながるよう実施した。	Ipad が次々に破損し，1 年生においては現在一人一台端末が保てない状態にある。新たな予算を確保できたため，iPad で一人一台設定できる予定である。	B	保護者アンケートより「子どもの ICT の活用能力が向上してる」という評価をいただく半面，「情報モラルについて，学校での指導が見えにくい」という声も届いている。	B	情報モラル教育の重要性を強く感じる。系統性のある情報モラル教育の構築が必要である。また現 1 年生の端末が古くなっているので，学習活動に支障のない端末を購入する予定である。

学校教育目標	「ひとりで考え　　ひとと考え　　最後までやりぬく子」
学校教育計画	２、登下校指導、および、人間関係づくりなどの教育活動の最適化を図る。(②生徒指導、③進路指導、④安全管理、⑤保健管理) 共同的な活動を通して得られる、感動や達成感を感じられるような教育活動の場の設定を工夫していくためにも、クラス間、学年間の意見交流を日常的に行えるようにする。

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
（1）学校生活上のルール、マナー、健康安全を、教職員と児童で共通理解し、その徹底を図る。(④安全管理・⑤保健管理)	①全校朝会や学年朝会、通学班指導，各学級での指導，外部組織との連携を通して，登下校中の安全に関する児童の意識を高める。	放送やオンラインでの朝会も活用しながら，基本的には運動場で集まる形となった。定期的に通学班指導を行うことができたものの，特定の電車通学の児童で課題が残った。	通常通りの通学班指導を再開するとともに，何か問題が起こった場合，当日あるいは翌日に複数の教員で解決を図るように努める。	B	保護者アンケートより「低学年の下校の態度がよくない。理解できていないからではないか。」という声があった。	B	子どもたちの安心・安全に繋がる通学班指導を，短い時間でもいいので月１回実施する。その中で，低学年の指導も徹底できるようにしていく。
	②健康安全の視点で，子どもの安全を守ることができるよう，教職員で，エピペン研修の緊急対応訓練を企画・実施し，その上で，日々の子どもの安全を守る意識を高める。	現在在籍している児童の緊急対応マニュアルを実際に活用し，教職員で，万が一の時の対応として，エピペン使用の緊急対応訓練を実施した。その後振り返りをもとに，マニュアルを見直し，普段から気を付けるべきことについても教職員で話し合うことができた。 クラブ活動における調理実習の実施に課題が残った。	訓練も実施し，確認もしが，食材調理実習における購入やグループ分け等，それ以前の段階で課題が残った。調理実習を経験していない世代も多く，より詳細なマニュアルが必要となる。	B	調理実習においてもマニュアルを作成し，経験の浅い教員であっても安全に実施することができるようにしたほうがよいという意見をいただいた。	B	来年度も同じ形の研修を実施し，教職員全体で，改善案を考えていくようにする。また給食以外の喫食についてマニュアルを作成する。
（2）人間関係づくりに向けて、自他の尊重や学び合いの精神の向上に取り組む。(②生徒指導・③進路指導)	①子ども・保護者とのコミュニケーションを大切にし，子ども一人ひとりへの細やかな配慮と，保護者との密な相談・連絡を行う。	昨年度に引き続き，電話でこまめに保護者に連絡をとることを教員全体に呼びかけ，密に連絡をとるよう意識して行動した。また学年・学校全体で，子どもたちの様子をこまめに共有し，対応できるように進めた。 学校アンケートでは，９３%が「学校から家庭への連絡は適切である」と回答している。	今後も継続しておこなっていく。また，今年度はホッとルーム対応の職員を置いた。	A	欠席や登校しずらい児童についてはロイロノートの活用がありがたいという意見をいただいている。	A	財政的には非常に厳しい状況であるが，ホッとルーム対応の職員を，週 2～3 回でもよいので，できる限り配置する予定である。
	②キャリア教育の視点もふまえ，外部人材を活用し，「本物」に出会い，子どもたち自身が，自らの興味・関心を広げたり，新たな視点で自己や他者を捉えたりと，多面的・多角	「未来探究科」の授業において，外部人材を活用することで，内容だけでなく，それぞれの学年が様々な方の生き方にふれることができた。	今後も継続して実施していく。	A	ゲストティーチャーできてくださった方たちから「自分たちにとっても大きな学びがあっ	A	来年度も，未来探究科や各教科の学びに応じて，ゲストティーチャーなどの外部人材を活用し，子どもが学びを得られるように支えていく。

	的に自らの生き方について考え，学びを深められる機会を設定する。				た」という声をいただいた。		

学校教育目標	「ひとりで考え　　ひとと考え　　最後までやりぬく子」
学校教育計画	３、ＰＴＡ活動、および、平野地域との連携の最適化を図る。(⑨保護者、地域住民との連携)

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1)ＰＴＡ活動・サークル活動と教育活動の連携の新たな可能性を探る。(⑨保護者)	①. ＰＴＡ役員の方々を中心として，学校側とＰＴＡの方々の連携をより強固なものにするとともに，ＰＴＡ活動のスリム化を図り，よりよいＰＴＡ活動の在り方を検討する。	本年度より，コロナ禍以前の活動にほぼ戻った。縦割り委員活動については，スリム化できた分と，一部の人に負担がかかる部分もでてきてしまっていた。サークル活動においては，子どもに返る形を検討し，サークル内での提案をもとに，実施した。学年委員会の活動について，特に大きな活動がないため，今後，縦割り委員会との役割分担が必要になってくると思われる。	一部の人に負担がかたよらないような体制を引き続き検討する。また，次年度はAED講習会を再開したい。	B	特になし。	A	多くの行事や活動が戻ってきたが，やはり，持続可能な業務の整理が必要となる。特に一部の人が負担に感じることのないような仕事配分を再検討する。
(2)ＰＴＡと平野地域保護者との共同的な活動に取り組む、(⑨地域住民等との連携)	①. PTA保護者や平野五校園，平野警察や区役所などの地域と連携し，子どもの安心･安全な学校生活を支えるために，防災・防犯を強化する。	・五校園避難訓練の主催校として平野警察と連携し，避難訓練を行うことができた。 ・校内の不審者対応訓練についても平野警察の協力のもと行い，避難の体制，校内の設備の見直しを図ることができ，子どもたちや教職員の防犯への意識も高めることができた。 消防署と連携して，煙幕体験等を開催することができた。	今後も各種機関と連携して，教職員だけでなく児童の防災意識を高める活動を行いたい。	A	警察署や消防署の方からも「継続して連携することで，安全面でも地域のモデル校となってほしい」とのことであった。	A	来年度も，地域の自治体と連携し，子どもたちの安心・安全のために必要なことを，学校内でも見直し，継続していく。